

平成 29 年度 第 8 回講演会 記録

日 時	平成 29 年 7 月 22 日 (土) 13:00～16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	NPO 法人・丹後の自然を守る会 代長 蒲田 充弘先生
演 題	「丹後の海を守り地域を創生する」
備 考	参加者数 163 名 (会員 145 名、非会員 18 名) 記録 山野 渉

はじめに

蒲田さんとのつながりは、平成 27 年 9 月に与謝野町で開催された「鮭のふるさとフォーラム in 与謝野」に招かれたことに始まります。平成 28 年 2 月、蒲田さんに神戸で「天然のシロサケが遡上する阿蘇海の自然と文化」の演題で、講演をしていただきました。蒲田さんは、シロサケ保護にとどまらず、阿蘇海をはじめとする丹後の自然、歴史、文化を多様に紡ぎながら、どのように地域を元気にするかを常に考えて活動され、大きな成果をあげておられます。本日は、天ぷら油の回収とバイオ燃料に変える活動を皮切りに、地域の資産を活用した地域創生の取り組みについてお話しいたします。(田中 克先生)

【講演要旨】

1. 活動のきっかけ

与謝野町に生まれ、学校卒業後京都市内でデザインと服飾関係の仕事に従事してきました。子供が生まれると、豊かな自然に恵まれた自分の故郷で育てたいと考え、家族で与謝野町に帰りましたが、目に付いたのは汚れた海でした。阿蘇海は外海の水と入れ替わりが少ない内海で塩分濃度は低く、昔からクロダイなどが産卵に入ってきて育つ豊かな海でしたが、生活排水流入による赤潮発生や、ダイオキシンなど流入による汚染で、昔の阿蘇海とは大きく変わってしまいました。そこで、阿蘇海を以前の状態に戻そうと、2003 年に NPO 法人丹後の自然を守る会を設立し活動を始めました。



2. ふるさとの海をきれいにしたい

(1) 廃食用油(天ぷら油)の再生

京都から故郷に戻った 16 年前、この地域では家庭の廃食用油(使用済天ぷら油)を生活排水と共に海に流しており、その結果、阿蘇海には魚など生物が棲みづらい状況になっていました。すぐに、各家庭を回り使用済み天ぷら油を回収することを始めましたが、地域の人々の理解を得るまでがなかなか大変でした。行政や各家庭へ地道に呼びかけました。回収を始めた当時、回収量は 1 か月 20 リットルほどでしたが、地域に次第に理解が進み、丹後地方 1 市 8 町で 1 か月 500 リットルにもなりました。回収した廃油は自宅に設置した小型のバイオディーゼル燃料製造装置(右写真)で軽油に再生し、バイオ燃料としてパッカー車などに使用されています。



これまで川や海を汚していた廃食用油がバイオ燃料になり、環境にやさしいシステムが構築できました。

(DVD で活動状況の紹介)

(2) 地域との連携

「天ぷら油を回収し燃料化する」活動がさまざまなテレビ番組で紹介されてから、この活動が丹後地方全体に広がり、廃油回収量は年 1 万リットルにもなり、製造したバイオ燃料は農家が使う耕運機にも使用されるようになりました。小学校の環境教育に取り上げられると子供たちから保護者に伝わり、ふるさとの海・川を汚さないようにする気運が町全体に広がっていきました。下水道施設が普及したことも大きな追

い風になり、阿蘇海は綺麗になり始めています。環境が改善されるとともに、アサリなどの貝が取れるようになりました。また、コハクチョウが飛来し、エサをついばむ光景が見られるようになってきています。

3. 小中学校の環境学習・地域イベント参加

(1) 小学生への環境教育

バイオディーゼル燃料製造装置で処理すると、処理前の汚い油がきれいな油に生まれ変わることを実物を見せ理解させています。また、廃油を再利用しないで川や海に捨てるとどうなるかを、いろいろな選択肢を与えて考えてもらうなどの方法で環境教育を進めています。

(2) 中学生への環境教育

阿蘇海を守るために自分たちに何ができるかを考えてもらう授業を年3回実施しています。

海辺の生き物調査や微生物がヘドロを分解する様子を観察し校内で発表してもらうなどの手伝いをして、学校の環境学習に協力しています。

(3) 地域イベントへの参加

2008年、自然公園ふれあい全国大会でバイオ燃料で動く発電機を展示、また京都環境フェスティバルでレーシングドライバー片山右京氏に京都のバイオ燃料の優秀さをアピールし、レース用車両に使用してもらう働きかけをしたところです。

4. シロサケの遡上と保護活動

- (1) 野田川には昔からシロサケが遡上し、丹後から奈良朝に納めていたことを示す木簡も見つかっています。近年野田川でシロサケの遡上が確認されました。由良川で放流したシロサケが迷い込んだのではないかと意見もあったが、春には阿蘇海でサケの稚魚が発見されたことから、天然のサケと考えられます。

このような伝統のあるふるさと(川)を守っていくために地元住民、大学生たちに協力してもらいシロサケが遡上を始める前に、川を清掃しています。

- (2) 野田川流域の下水道普及率は、川下は90%程度ですが、上流は60%程度で遅れています。シロサケ保護の名目でもって、下水道普及率を高める働きかけをしているところです。

- (3) 野田川清掃作業に参加する学生から一人千円の参加費をもらい、公民館に宿泊してもらっています。そこで地元の人々と川のこと、サケのこと、環境のことなどを語りあい、地域住民と学生が一つになって活動しています。大学が行う地域活性化のゼミに参加する学生もいて、彼等の感想は、「実践的に活動できるし、地域の課題がよく見える」と好評です。

(シロサケ産卵を記録したDVD映写)

- (4) このDVDを専門家にみてもらうと、天然のシロサケが遡上する様子を記録した本邦初めての記録とのこと、新聞社に知らせ報道してもらいました。子供たちや町民にも見てもらい、また与謝野町長には、シロサケは与謝野町の宝であり、観光ビジネス以上の価値あるものにしようと働きかけています。このような活動は行政主導ではなく、民間レベルで盛り上げ、進めていくべきと考えています。

5. 国際ボランティア協会と協同で阿蘇海の清掃・牡蠣殻撤去

阿蘇海に盛り上がるくらいに付いた牡蠣殻を取り除くことは、潮の流れをよくするために大切な作業ですが、体力的に厳しいので国際ボランティア協会に百人ほど若者の派遣を要請しています。全国から若者が泊まり込みで地元の人々と交流しながら作業に励んでくれています。撤去した牡蠣殻は農家に販売し、桑畑の肥料にします。撤去しただけでは牡蠣殻はごみですが、肥料にすることにより循環型になります。このような仕組みを実際に経験することは学生にとりよい原体験になると思っています。(右写真：牡蠣殻撤去風景)



以上です。ご清聴ありがとうございました。

お断り：バイオ燃料製造装置と牡蠣殻撤去作業風景の写真は蒲田先生が講演で使用されたパワーポイント資料から借用しました。

【田中 克先生 所感】

1. 蒲田さんのお話を、圧倒される思いで聞かせてもらいました。実は、蒲田さんの事業は今日お話しされたことだけでなく、他にも多くのことを手掛けておられます。その一つは栽培されなくなったミカン畑の再生であり、北近畿タンゴ鉄道と提携して収穫したミカンを車内販売し、列車の中でないと買えない商品にされています。
2. 今日のお話は前回の古田さんのお話と共通したところがあると感じました。お二人とも「論より証拠」そのものですね。証拠を明らかにしていけば理屈は後からついてきます。
3. 「環境だけでは物事は進まない」とお話しされました。それは確かだと思いますが、私は逆説的に、「環境」ということを現代の社会は狭く捉え過ぎていると考えています。そうではなく「環境」とは「人間の住む社会や背景そのもの」であり、人間を含めた存在といえます。もう少し言えば「人間とは何か」そのものでもあり、全てが含まれるトータルなものが本来の「環境」と考えています。このことを蒲田さんは私とは逆の方向からお話しされたのではないかと思います。
4. 蒲田さんの出発点は、「子供の時に阿蘇海でアサリなどを捕った原体験」であり、のちにふるさとに戻るきっかけになりました。このような原体験を私たちは今の子供たちに、どのように提供できるかが非常に大きな課題と思っています。
5. 森里海連環で言えば、単に森、川、海という具体的な自然のつながりだけでなく、例えば片山右京さんとかかわりを紹介されたように、少し工夫をすると人々を含めた新たなつながりが生まれきて、ちがう世界が見えてくることにもなります。
6. もう一つ大切なことは、時間のつながりをつくるということです。小学生の教育から始まり中学生、大学生へと展開されていていきます。大学生にはすぐに結果を求めるのではなく、彼らにとっては貴重な原体験を提供することが重要だと思います。
7. 我々も先はそう長くないので、これからの生き方をどうするか真剣に考えなければと思っています。蒲田さんの今後の活躍に大いに期待しています。

【記録者所感】

コツコツと地道に天ぷら油を回収してバイオ燃料化する活動を始めてから、地元の方々の理解と協力を得て成果につなげるまでのご苦労に感服しました。また、地元の方々を巻き込んでの積極的な前向きな姿に感動しました。野田川や阿蘇海のゴミの清掃や牡蠣殻撤去作業は行政からの強制ではなく、地元の方々のふるさとを思う心からの自発的な活動を学生達が支援する方式なので、持続的に続いていくことでしょう。機会をつくり一度参加してみたいと思っています。

以上